

看護部門年報の発刊にあたって

当法人は、皆さんの医療、看護に対する責任感と熱意により、概ね事業計画に沿った運営ができていることに感謝いたします。

高度で質の高い医療を提供するうえで、看護の果たす役割は大変重要であり、その役割を担う人材の育成が不可欠で、各看護部等においては、研修をはじめとする様々な活動をされていると思います。

機構を構成する4病院にはそれぞれの役割があり、必要とされる看護の内容も異なります。また、医療を巡る環境の変化は速く、看護にもそれに対応することが求められています。人材の育成等には不断の取り組みが必要です。

このため、看護部（科）においては、看護の理念や基本方針を明確に示し、目標を定め、共通する看護力の養成をはじめ、そのしっかりとした基盤の上に立って、病院の役割に即した実践力の養成・向上に計画的、かつ、創意工夫を凝らした諸活動が毎年度行われているところです。こうした活動は各看護部（科）において主体的に行われており、この年報は、各看護部（科）において、目標達成のために実践した、研修や教育活動などを記録するものであります。

各年度の成果等については、各看護部長門長のあいさつにある通りであり、その達成状況を適切に評価することを通じ、翌年度の取り組みへと繋げていただければ幸いです。皆さんの持てる能力がいかに発揮されることを期待するものです。

医療をめぐる環境はめまぐるしく変わりますが、当機構における看護部の役割を認識し、しっかりとした目的意識をもって、看護部の在り方等に総括的に対応する看護管理担当との連携、調整を密にした取り組みを期待しております。

最後に新型コロナウイルス感染症はその位置づけが第5類へと変更となりましたが、収束したわけではなく現場への負荷も続くと思います。またコロナだけでなく病院の機能強化や効率的な運営の確保に伴う負荷もあるかと思いますが、健康に留意されたうえで日々の業務に奮闘いただくことを期待しております。



理事長 竹内 功

令和4年度を振り返って

2022年度の広島市民病院看護部では目標を2つ挙げました。

1つ目の目標は、看護職の責務を担い、生活と保健医療をつなぐ質の高い看護を提供する。2つ目は、お互いを認め合い働きやすい職場環境を作るでした。

今年度は、コロナ感染の拡大に伴い院内クラスターが発生し、現場の緊張感が高まった年であると同時に、過去の経験を活かした年でもありました。



それは、各部署で感染者が発生し、部署だけでは勤務調整がつかない状態となりました。そのため、患者へ安心・安全な看護が提供できるよう看護部全体で派遣応援し合い、看護師ひとり一人が自分たちのできる最大限の力を発揮したことで、1つ目の目標である看護職の責務を努めることができました。

また、障がい者パラリンピックへのボランティア派遣など、院外貢献したことで、看護専門職としての責務を意識する機会を得ることができました。生活の場を見据えた支援強化の取り組みでは、入退院支援加算や入院時支援加算件数増に結びつけ看護部全体で経営に参画することができました。

2つ目の目標である働きやすい職場環境については、教育研修による意識づけや環境調査、看護職員満足度調査を行い、現状を知ることができましたが、職場環境改善に向けた取り組みなど進めるまでに至らず今後の課題となりました。

2023年5月にはコロナ感染症分類5類への移行や、G7広島サミットの開催、働き方改革など新たな対応が求められ進められます。私たちは、看護の専門性を守りながら、タスクシフト・タスクシェアが遂行できるよう努めて参ります。

どうぞ今後ともご指導・ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

広島市立広島市民病院
副院長（事）看護部長 長谷川 聡子

令和4年度を振り返って

令和4年度は、病院にとっても看護部にとっても非常に大きな転換期となりました。令和4年5月1日、新築移転をし、広島市立北部医療センター安佐市民病院として新たな歴史を踏み出しました。

新築移転により病棟数も11病棟から13病棟に増え、また精神科病棟、そして地域救命救急センターを備え、高度急性期病院として地域医療に貢献するというのが大きな使命になりました。

看護部では、『変化に適応し、成長につなげる看護部組織』を目標に、「新たな病棟再編に対する看護提供体制の構築」「入退院支援体制の構築」「外来看護体制」と、3つのプロジェクト「病床管理」「看護提供体制」「外来看護」に取り組みました。



病床再編となり、スタッフも異動し新たな人間関係を構築しながらそれぞれの病棟機能に適応し、安全で質の高い看護ケアが提供できる体制を作ること、病床管理ではPFMの強化をして適切な入院期間の中で、必要な患者ケアが提供できるようにすること、そして外来では複数の疾患を有する患者の療養支援ができることを目指して活動をしていきました。

その過程を振り返ると、開院してまだ病棟機能に慣れていない状況下で、想定以上の救急患者さんの受け入れや、新ナースコールシステムやIOTを活用したNFC連携などハード面にも慣れていきながら、患者さんに看護を提供する環境はかなり過酷であったと思います。

緊急入院を受け入れる病棟は昼夜を問わず多くの救急患者さんを受入れ、また一般病棟は病床数の減少から夜勤体制も変わり、これまでとは異なりフォローできる体制が脆弱になり、個々のスタッフの皆さんが最大限の力を発揮しながら、24時間の継続性のある看護をしていただいたと思います。

その様な渦中のなかでも、COVID-19への対応も行い、COVID-19病棟も再編に再編を重ねながら運営していき、看護チームへの参加もしていただきました。

病棟再編、COVID-19対応、想定以上の入院患者さんの受入れ、看護体制の変化等多くの課題に直面しながら、令和4年度を乗り越えることができたことを思うと、とても感慨深いです。

すべては、スタッフの皆さんがさまざまな変化に適応できる順応力の高さと、看護専門職としての責任感と、看護実践力そしてチームを形成し協働する人間力の高さであると思います。そして、相手に対する優しさだと思います。とても感謝しています。

これからも、看護師が看護に専念できるような働きやすい環境と、看護のやりがいを感じることでできる環境、そしてそれぞれの生活を大切にできる職場づくりになるように今後も励んでいきたいと思っています。

広島市立北部医療センター安佐市民病院
副院長(事)看護部長 松原 朱美

令和 4 年度を振り返って

今年も桜が咲き始め、春の訪れを感じるようになりました。コロナとの戦いが始まって3年が経過し、これからどんな年になっていくのだからと案じながら、令和 4 年度を振り返っていきます。

令和 4 年度は 2 つの重点目標をあげて取り組んできました。

1 つ目の目標は、「After コロナを見据えた病院経営」としました。終わりが見えないと思っていたコロナとの戦いは、想像以上に過酷なものでした。しかし、出口は必ずあると信じ、After コロナをどう生き抜いていくのか、当院のあり方を模索していきながら、健全な病院経営を実施していくための体制作りに舵をきりました。

まず、以前から要望の強かった障害児(者)短期入所事業(以下、レスパイト)の受け入れ病床の拡大に取り組みました。従来からレスパイトの受け入れを 4 階病棟と 5 階病棟に分けていましたが、5 階病棟に集約し、看護単位を再編することで、2 床から 3 床へ増床することができました。このことにより、レスパイト担当を専従にすることができ、きめ細やかなケアの提供が可能となりました。利用者のご家族からも大変喜ばれ、スタッフのモチベーションの向上につながっています。

次に、同じ機構内の広島市民病院との連携強化として、迅速に対応出来るような組織作りに取り組みました。特に、がん化学療法の連携については、広島市民病院の通院治療センターへ看護師 2 名を派遣し、研修をさせていただきました。外来化学療法室を整備し、院内で行っている治療を集約しました。体制が整った段階から、大腸がんのアジュバントの受け入れから開始し、膵臓がんの術前化学療法、乳がんのアジュバント等、対象疾患も拡大中です。関連部署における勉強会の開催や院内の連携強化を行う事により、スムーズに受け入れることができるよう、今後につなげていってみたいと思います。

2 つ目の目標は、「ホスピタリティマインドのもと、ひとり一人の価値観を尊重した質の高い看護を提供する」としました。看護とはサービス業と言われるとおり、結果も大事ですが、それ以上にプロセスが大切です。コロナ禍において煩雑になりやすい環境ですが、常に「おもてなしの心」をスローガンに取り組みました。まず、気持ちの良いあいさつの徹底、相手(患者さんやご家族)の変化を感じとることができるよう対人感受性を高める、相手の立場で考え行動する、そして、相手の喜び＝仕事のやりがいに発展させることができれば最高ですね。

さいごに、私事ですが今年度で定年退職を迎えました。39 年間、組織に守られ、そして組織に育てていただきました。この日を無事に迎えることができましたのも、皆さまにご支援いただいたおかげだと感謝しております。この場をおかりしまして御礼申し上げます。

皆さまのますますのご健勝とご多幸を、心よりお祈り申し上げます。ありがとうございました。



広島市立舟入市民病院
総看護師長 森 麻美

令和4年度を振り返って

令和4年4月に総看護師長を拝命し、重責に身の引き締まる思いで日々過ごしております。総看護師長としての初年度となった令和4年度は、診療報酬改定、新型コロナウイルス感染症、病院機能評価に対する対応などで非常に多忙な1年となりました。



まず、4月の診療報酬改定では、回復期リハビリテーション病棟の重症患者の入院割合が10年ぶりに引き上げられました。当院のような入院料1を算定する病棟では、重症患者の入院割合がそれまでの30%から40%に引き上げられたことから、発症後の早い段階での急性期病院から受け入れや、介護度のより高い患者の受け入れが必要となりました。しかし、一方で、対応する看護師等のマンパワーを補強するための報酬の手当は導入されませんでした。こうした中であっても、当院では、従来の職員体制のもとで患者さんの安全を第一に考え、急変時には病棟間の垣根を越えた対応を行うなど、限られた環境、限られた職員数のもとで可能な限り最善の対応を行うことで、質の高い看護を途切れることなく提供してきました。患者さんや家族の気持ちに寄り添い、努力を惜しまず日々対応している職員の姿に改めて敬意を表したいと思います。

新型コロナウイルス感染症が収束と流行を繰り返すなか、令和4年度に当院で初めて認定を受けた感染管理認定看護師を中心に、病院が一体となって感染対策を実施してきました。8月に複数の院内感染者が発生した際にも、迅速かつ的確な対応により感染拡大を最小限に抑え込むことができました。また、感染防止対策として面会や外出訓練が禁止となる中であっても、オンライン面会や窓越し面会など、可能な限り患者さんや家族の気持ちに寄り添った看護を展開してきました。

10月には病院機能評価の訪問審査を受審し、すべての分野において高い評価結果で認定されました。日頃から実践している質の高いリハビリテーション看護についても高い評価をいただけたことで、職員のモチベーションアップにもつながったと感じています。

今後は、高齢化の進展、在宅医療の推進、急性期治療の進歩などにより、回復期リハビリテーション医療に対するニーズはますます高まるものと考えています。すべての看護師により高い能力が求められることから、その期待に応えられるよう、専門性の高い看護師の育成に努めていきたいと思っています。

リハビリテーション看護は、疾患を看るのではなく、その人を看ること、その人の生きてきた人生、そしてこれからの人生を共に考え支えるという志を胸に、職員一丸となって取り組んでいきたいと考えています。

患者さんからは「この病院を選んで良かった」、職員からは「この病院で働き続けたい」、この言葉を一人でも多くの方から聞くことができるよう日々努力してまいります。

広島市立リハビリテーション病院
総看護師長 奥田 加世